

農の本質、イタリア農業のダイナミズムを味わう

評 小口広太（千葉商科大学准教授）

本書を手に取り、まずタイトルに惹かれた。社会的農業？いったいどんな農業？とワクワク。著者の中野さんは、弱者を社会に包摂し、農業・農村の資源から多様なサービスや価値を創出する農業、野菜だけでなく人間の世話を焼くおせっかいな農業と表現する。

民主化運動の流れや社会的協同組合などが社会改良のために農業を選び、農業経営者が農業再生のために社会との接点を見出す中で、社会と農業の関係性が解きほぐされ、その結節点に社会的農業＝社会的イノベーションが生み出されたという。

社会的農業と聞くと、経済の視点がないのでは？と思われるかもしれないが、そうではない。豊富な統計データをもとに、農業経営と地域経済が社会的農業を含むア

グリツリーズモと多角化活動によって支えられていることを明らかにする。2020年代以降、新型コロナのパンデミック後も進化し、気候変動時代をしなやかに、しぶとく生き抜くイタリア農業。社会と農業だけではなく、経済との関係性も解きほぐされている。社会的農業は、社会の中に経済を埋め込んだ農業である。

中野さんは、あとがきでイタリアの社会的農業を知っていることは日本の農福連携にもヒントになると述べている。私はもっと広い視野で捉えたい。「誰も排除しない」「誰もがそこにいていい」という空間をつくり出す農の営み。野菜や人間とともに生きものも（イタリアは世界でトップレベルの有機農業大国！）。このような空間があるから農業はおせっかいができるの

ではないだろうか。農の営みを大切にする農業はやさしくなれる。私は、本書から農の本質を感じることができた。

長年イタリアで暮らした経験を持ち、丹念なフィールドワークを続ける中野さん。農業、社会、制度、国を変えようと真剣に楽しく食と農業に向き合う市民の姿が生き生きと描かれる。本書を読みながらイタリア農業のダイナミズムを味わい、読んだ後は社会的農業というやさしさに包まれてほしい。



『おせっかいなイタリアの社会的農業 アグリツリーズモから社会的弱者の支援まで』

中野美季 著

農文協 2970 円（税込）